

農業第一に奉公可申候。貴國は別而金銀の少き所故、辛抱第一に働ぎ可申候。但し貧乏人には成丈け施行致し、門立、乞食には施食致し可申候。

氏神并墓参りは毎月致実意を以て人を大切にすべし。品により此地より拙名前を以て参り候者有之候は、大事に取扱可申候。九州は至つて付合ひの町噂なる所故成丈け馳走すべし。當所は京、大阪より人品の宜き者のある所なり。田舎者と思ふべからず。実に辺境の大上々國なり。

此度は何の用も無之候へども、あまりたより無に付書通致し候。届次第直に返事送り可申候。何んぞ遣し度候へ共、陸便は至而欠け敷、商人の賣物迄も御改め有之程之事故、送り物は双方よりとんとやめなり。唯無事又は死生之事、其外差支無之事のみ相認可申候。目方一匁に付二厘五毛のちんにて千萬里迄も行く郵便なり。實に安いもの也。早々返書待入候也。

亥 新曆八月十八日
申、七月十五日

白川縣肥後國天草郡一町田村

臨川庵 印

愛知縣尾張國丹羽郡尾崎村

脇田壽平 殿

小供ニハ土用中ニ二三度鰻ヲ食ハスベシ
鮎ハ痢病ノ藥也。惣而川魚ハ藥也

鯰^{ニギ}血ノ出ルニハ蓬ノ葉ヲヨクモミテ鼻ノ中へ入レレバ直ニ止ル也。
大妙方也。

スベリヒヤウト云草、畑ニタントアリ。是ヲウデテヒタシ物スハアエ物ニシテ食フベシ。至テヨシ。釜へ七月十三日ノ供物ニスベシ。

夏向ハ小麦ヲ折々食スベシ。惣而麥飯ハ禁ナリ。
ウドンノ類ハ暑拂也。六月廿日ニハ必ス食スベシ。

紫蘇、茗荷、蓼、其外色々野菜ノ類ハ屋敷回り之畑ニ作り置クベシ。客人ノ時ニヨシ。山午蓴ハ腫物ノ禁。又ハ汁ノ菜ニヨシ。植置ベシ。

無益ノ救生ハ必ス致スベカラズ。禁用ノミ。

右の書簡は明治八年夏の故郷への便りである。上人は実に見事な筆跡で度々故郷へ書を寄せられ、右の文面のやうに極めて懇切にいろいろ書かれてゐるが、この年（明治八年）の四月八日の書信とこの手紙は疏石上人の老衰を慰はせるやうな筆跡で、手先も大分不自由になつてゐたらしい。

又右の文面にもあるやうに明治七年、宗教制の改革による教義上といふ官に仰付られになつたが、これは唯さうした名目だけに過ぎなかつた。

かくて上人は明治八年十一月廿五日、寒風寂莫の日、上人の轉變極りなき生涯の幕は天草の孤島で靜に閉ぢられたのであつた。

寔に上人の一生とそは「清淨潔白」の四字に盡くされるであらう。そして上人の天草在住は實に四十四年。享年七十五であつた。

(五) 上人の性行

一 孝養

上人が孝養の心の厚かつたことは度々、前条までに附加へて置いた。配流と定まり京都出發の折、

双親の事を思ひつゝ、

送るべき人を慰へは手のまひも足のふむ問もなき悲しけれ。
と哀歎せられた。

そして天草配流の翌年。天保四年函親への書信中に

欲説離情淚自垂 南風六月逐船吹

傾頭更嘆從來夢 學隔深處父母悲

とある。臍を摩りて深く慮ふ父母の悲しみ……の條に至つては、涙なくして誦する事の出来ない一節である。かの「親恩ふ心にまさる親心……」と詠じて獄屋に投ぜられた吉田松蔭先生のおの當時と、上人の此の詩を賦せられた時と、その心持に於て一脈相通するものがある。此の詩によつて私達はしみん——上人の孝養の心の深さを感じるものである。又同じ書簡に

——前畧—— 扱極樂と申所は諸々の樂しみのみうくると阿彌陀經にも有之候。而たのしみばかりの國にて候。其上父子相迎會と申して、此世にて念佛多く申候得ば過去の親も子も一類も皆々蓮台上にて出會、無上の樂をいらす事にて候間、此後拙僧へ御面會被成度候はゞせいだして後世にすけたまへと思ひて御念佛かんやうにて候。左候得ば、此世界はとかくやくそく事と御あきらめ此上は何程相嗟き候而も無益之事にて候間、兎角拙僧の事は打あすれ、夫よりは後世大事とあけくれ南無阿彌陀佛マタマタと御念佛が一大事に而候。拙僧はいまだ盛年の事故、心身無事に有之候はゞ餘命之内には如何様の芽出度事も有之哉、旦又持前の福分と申もあるものに而候へば假令嶋人に相成候而も決而衣食等に不自由は無之、外に悪事もなく候へば人々の下には居り不申候間、必御あんじなく、老少不定と申内に先老人は只今も知れぬ命にて候得ば、はやく極樂へ参らむと思召、とかく御念

佛事要と御つとめ可被成候。尚又当島の様子等は此有藏より篇と相聞可被下候。

是々も各々方精出して御念佛被成候はゞ不遠内極楽の華台の上にて遂佳會萬事御物語可申上候。夫れを左のしみに旦々御念佛御唱可被成候。是より外に申上度儀、一向無御塵候。尚皆々へも好々御申聞せ可被成候。

天保四己年正月廿五日

天草島

南無阿彌陀佛 穴賢

前大僧都 法眼 定 舜

此の書簡によつて上人の心持は孝養の心から更に、双親の信仰心を深めようと祈念してゐられる事が窺はれる。又これによつて、上人の天草のあけくれか、遠い故郷の父母の身の上へ思ひ及んで、如何に心を傷めて過されなかつて慰像される。又天保四年。

配所へ下りて後、故郷双親のもとへよみて贈るうた。

もろ共にほとけの御名を唱へつゝ、やがてちぎらむ花の臺に
かりの世の名残はいかになりぬとも ともに詠めむ極樂の花

とあり、又天保十一年

やつかれ、むかしのこと、ろざしを、うしなひて、はからず不幸の身と

なり、このつくしのうらにくちはつることなとおもひて
たらちねのあけくれなでし我身ぞと

心ならずも、過る世ぞうき。

とある。この心持こそは、常々上人の脳裏から離れなかつたもので、自身の肉
体——そしてそれが懐しい両親が旦夕撫育されたものである事を忘れがちな心
を誡められた切々たる孝心の発露である。不忠、不孝と身を鞭うたれた峯山先
生の孝心を思ひ出されるではないか。又上人が矢の如き歸心——天保十二、弘
化四年の歸郷も、全く上人の孝心のほとばしり出た結果でなくて何であらう。

更に此の弘化四年の旅の原因ともなつてゐる弘化三年の父の病の知らせは、上
人、胸を衝く思ひのあつたもので、

丙午、暮冬有同業之友人小泉氏者依官廳之赦
而歸郷之催。又菴兄遠寄書而曰雙親病ト云云

故悲歎之餘賦焉

時氣荏苒歲將闌 同朋有喜我無歡

鄉書判處雙親病 萬事紛然心不安

とある。上人の焦心苦慮思ふべきである。その翌春また左の記録がある。
去年の秋、故郷慈兄のもとより双親の病を告来りけるを、心ならず

此春まで日を送りけるに、折ふしみやこの方へ歸る人のありけるに
 やつがれも夢になりと、故郷へ歸らばやと思ふおりから、くちずさ
 みけるうた。

おもひそみぬる夜に結ぶ夢にぞに

我故さとへゆかましものを

以上は詩歌にあらはれてゐる上人の孝養であるが、更に嘉永二年の尾崎藥師堂
 へ阿彌陀佛尊像を寄進された美譽（本文参照）などによつても上人の至孝はうか
 び知られるものである。

（二）伊勢大廟の信仰

上人の信仰は佛道信仰は言ふまでもない事であるが、然も伊勢大廟の信仰も厚
 かつた。左の記録は上人伊勢兩廟信仰のさまを物語る貴重な資料である。

（弘化三年九月 一 西洋漫草丁譯文）

余嘗て南勢の西宗廟を信ずる事已に尚し。然るに荅州の地は外宮降札の所に
 して内宮の禮有る事なし。故に生平西宮の神靈を安んぜんと欲する事、亦久
 し。茲に天保辛丑の秋、一夜夢に外宮に詣つ。覺めて後内宮に到らざる事を
 悔ゆ。後西三日を経て、京師法元の所より贈物あり。之を披見するに佛前の

具本魚なり。その中に内宮の寶牘あり。而して御師記して岡田三六太夫と曰ふ。實に不慮之賜、不測之降臨と俯仰して之を拜し、感涙衣を潤すの餘、一絶を賦して以て記す。詩に曰く、

陰々巖窟自相開　塵世界平幾萬回
共仰神明垂跡處　何圖寶牘來風來

なほ、安政二卯年の參拜は又能く上人の西宮信仰のほどを知る事が出来る。

〔六〕上人の末裔

上人は天草配流後、非俗非僧として生活中に妻帯せられたのであるが、その年月は不詳である。上人の遺物・書類等を調査してみたが、之に関する記録は更にはない。然し想定すると天保六・七年頃であらうと思はれる。

天草島での調査によると、上人の内室は御崎そもと云つて、一男、一女を擧げられた。一女は其名も不詳で夭折せられた。長男は尾崎慎吾と云つて、現在の墓所は、その血族の竹下平吉といふ人が守つてゐる。

御崎そもは元天草郡内崎津村の某に嫁いで一女を生んで歸家してゐた人であつた。上人の歿後は先の娘の子である竹下平吉方で扶養されてゐたが明治三十二年

旧十月十日九十八の高齡で逝去せられた。

長男尾崎慎吾は十六歳の時、(安政二卯年)上人と共に参宮並に所々巡拜の長
い旅に隨行したのであつたが、病弱な素質で、醫師を以て身を立てようとし、長
崎へ遊学などしたが、二十二歳の青春で早世した。
上人の墓所(天童島信福寺境内)の傍に左の銘の墓石がある。

(前面)

青春壯譽良一醫生

(側背面)

俗名尾崎慎吾源壽堅墓

予曾遊三郡又詣諸國名山

靈地結勝緣乎 而醫學

於崎陽也 生年二十二歲

文久元年閏夏五月十五日

卒去 辭世曰

一聲鶴御起涼風

心月圓淨靈沼中

はすの葉に

おく白露の

一期かな

茂一郎立之

石工平治

へ茂一郎は上人の内室その弟で、現時赤尾岩太郎氏の祖父に當る人である。現在上人の位牌及内室、慎吾の位牌を祭つてお守してゐるのが赤尾岩太郎氏である。

天島亭での調書では慎吾の姉天折とあるが、明治十一年頃の尾崎との往復文書に依ると、上人の跡は、慎吾の姉の子良太郎といふのが相続してゐたやうである。参考のため門人田代隆教氏からの書信を左に掲げて置く。

―前畧―

尊師跡相統良太郎義は、亡良一子（慎吾）の姉の子にて則尊師の御孫に當り申候。跡式等は決して氣遣ひ等は無之見込に候。但亡良一姉の良太郎母も近頃、御崎実父方の茶わかしと相定め御同人よりも、萬事懇々たる御世話に相成居申候。

若し行届兼候節は門弟の銘々よりも可成氣を付可申筈に覚悟罷在候。此段乍恐御安心迄申上候。